

『ぶらっとヒマラヤ』(藤原章生著)

いつものことであるが、本書も腰巻評論に釣られて買って見た。この腰巻はイタリア・ローマ歴史の著作で有名な塩野七生女史の筆で、その腰巻がまたなんとも人を喰ったものだった。

曰く「私の友人の中でも最高にオカシナ男が書いた、フフツとは笑えても実生活にはまったく役に立たない一冊です。それでもよいと思われたら、手に取ってみてください」。

本書の題名や瘋癲暇人風のカバーの挿画から想像すれば、昼はヒマラヤ山麓のぶらぶら歩き、夜はカトマンズやポカラの裏町の赤提灯酒場放浪記の類の気儘な^{へそでん}臍天斜め読み本かと期待もせずにページをめくってみた。それが、どっこいあにはからんや、予想に反して一気に引き込まれて読んでしまったのだった。

『ぶらっとヒマラヤ』という“ヒマラヤ”は、題名から想像されるその辺の山麓ではなく、なんとヒマラヤ8千^{メートル}峰14座の中でも困難な部類に属するダウラギリ峰8,167mで、^{へそでん}齡還暦にしてこの高峰の登頂を目指すというものだった。腰巻が言うように確かに「フフツとは笑えてもまったく役に立たない」文章は、始終“ぶらっと”の気分で、熊さん八つあんの横丁談義の域を越えない語り口であり、そこに何かを期待してはいけないと思わせるような鷹揚たる筆致であるからして、最初は、このオッサン一体何を言いたいのか、と馬鹿らしくなったものだった。

しかし、それは大間違いであった。著者の自己紹介によれば、著者の文章術のモットーは“答えの無い話をやさしく面白く”だそうで、本書もそのような落語風のオブラートに包みつつ実はダウラギリ挑戦を舞台に著者の一人の人間としての心の移ろいを綴ったもので、登山という行為を介してそれなりの年齢(還暦)になった人間が考えた老い、恐怖、死、そして生についての記録であると「はじめに」で白状されている。

成程、なるほど、合点の介。この本の著者は実は新聞社勤務の大半を南アフリカ、メキシコ、イタリアなどの海外特派員として過ごした新聞記者で、戦場、人物、時代ルポなどを得意とし、植民地支配や差別の歴史を生き抜いてきた南アフリカの人々のルポルタージュ作品(開高健ノンフィクション賞受賞)などの著書がある新聞記者・物書きである。中学生の頃から岩登り・沢登りなどのクライミングにもものめり込み、大学時代にはヒマラヤ遠征隊にも参加しているそうだから、登山にも造詣が深そうだ。

そのような訳で、若い時の山での体験や還暦近くになってからのダウラギリ登頂(実は悪天候のため頂上までの標高差900mを残してアタックキャンプで撤退したが)での体験を通して、登山という営為がどのようなものであるのか、またそれが年齢とともにどのように変化してくるのか等々を“フフツとは笑えてもまったく役に立たない”文章に綴っているという塩梅である。特に、ヒマラヤの高峰での酸素使用の是非についての論議は興味津々たるものがあり、高山病予防のテクニックにも感心させられる。

また、加齢に伴う気持ちの変化・ありようについての蘊蓄も、末期高齢化して登山活動への心技体共に寂滅状態にある小生には目から鱗でもあった。

塩野七生婆さんに騙されたと思って一読をオススメしたい。

毎日新聞出版 2021年3月刊 本体1300円

(酎)

